
空ニ奏デシ永遠ノ唄

舞桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空二奏デシ永遠ノ唄

【Nコード】

N0012B

【作者名】

舞桜

【あらすじ】

永遠の生命を持つ種族【アルナト】。フィエルの村に住むルイは、そこでアルナトの少女と運命的な出会いをする。人間が築き上げた文明と動物が作り上げた自然・・・その二つが共存しあう大陸、【エルメス】を舞台に繰り広げられる。「永遠の生命」を持つ一人の少女と、それを守ろうと立ち上がる、一人の少年の物語――

プロローグ（前書き）

皆さんに楽しんでいただける作品を目指していきたいです。もしよろしかったら、読んでみてください。

プロローグ

遠い、遙か遠い昔から、この国には一つの《伝記》が語り継がれている。

この世界の創造者たる“神”と、極限まで発達した文明を持った“人間”。そして——
永遠の生命を持つと言われる、“アルナト”

これらの誕生と繁栄、そして終焉までが書かれている伝記——
運命の記憶。

だが現代、この伝記を知る者は少ない。

この伝記に記された《伝説》は、時の流れと共に、人々の記憶から徐々に消え去っていった。

だが、アルナト達は覚えている。

悲しく辛い、決して忘れることの出来ない、この《伝説》を——

——

むかしむかし、ある世界に、ひとりの神様がいました。

神様は、その強大な力で“庭”となる宇宙を誕生させ、自分の“住居”となる地球を誕生させました。

やがて地球には生物が住み始め、地球は生物で満ち溢れた星となりました。

それらの生物は“プリム”と呼ばれました。

しかし、神様はともいばりんぼうで欲張り。この世界は全て自分のものだと思っていました。

やがて神様は、自分の“住居”である地球に住む生物“プリム”を、残らず絶滅させてしまったのです。

しかしある日、神様は広い世界を管理するのに、自分ひとりでは大変だと気付きます。

世界の管理を手伝わせるため、神様は仕方なく、“人間”と“動物”を作り出しました。

“人間”には高度な頭脳を与え、“動物”には優れた肉体を与えました。

“人間”と“動物”は、互いに共存し、忠実に世界の管理を行っていきました。

“人間”は神様を祀り、《文明》を作りました。

“動物”は神様の庭として、《自然》を作りました。

“人間”と“動物”の活躍に、神様は大満足でした。

しかし、平和な日々はいつまでも続きませんでした。

ある日、“人間”と“動物”達の争いが始まったのです。

《文明》を大事にする人間と、《自然》を大事にする動物の、思想の相違が生んだ争いでした。

人間は動物達が築き上げた自然を壊し、動物は人間達が築き上げた文明を自然に還していきました。

激しい戦いは、何年経つても終わりませんでした。

困り果てた神様は、再び人間と動物を滅ぼすことにしました。

『このまま争われていたのでは、地球が壊れてしまう。お前達には、滅んで貰わなければならぬ。』

その言葉を聞き、動物達は納得しました。

「自分達は神に従うもの。神が滅びろというのであれば、私達は滅ぶ」

と。

しかし、人間は神の言葉に納得しませんでした。

「自分達は滅びない。我々を滅ぼそうとするのならば、我々はあなたを滅ぼす。」

知能が発達しすぎた人間は、神に対して、《反抗心》を持っていたのです。

怒った神様は、その力で人間を滅ぼそうとしました。

しかし、極限まで発達した人間の文明も負けてはいませんでした。神様と人間の激しい戦いは、何十年にも及びました。

そして、人間は遂に神を下したのです。

神様は7つに分解され、「ファイエル」、「アーズ」、「ラー」、「ボルザルド」、「ゼフィー」、「アクアリウス」、「デスギズーア」

として、それぞれ7つの神殿に封印されました。

しかし神様は、封印される間際、最後の力を振り絞り、人間の文明を滅ぼしたのです。

そして、一部の人間に呪いを掛けました。

それは、“永遠の命を与える呪い”でした。

呪いを掛けられた人間たちは、永遠に生きる事を余儀なくされました。

その事に歓喜する者もいれば、嘆き悲しむ者もいました。

これが永遠の生命いのちを持つ人間、“アルナト”の誕生だといわれています。

「生きる事は、何よりも苦痛である。お前達は、その苦痛を永遠に背負っていくのだ。」

そう言い残し、神様は封印されたのでした。

運命の記憶 Memory of des
tiny 第一節 世界の崩壊と呪い より

人間が作り上げた文明と――

動物が作り上げた自然――

その二つが共存しあう大陸、“エルメス”。

そして“エルメス”だけに存在する種族、“アルナト”。

永遠の生命——あなたは欲しいと思うだろうか。

欲深い人間の事だ。きっと多くの人々が「欲しい」と答えるだろう。

しかし、「彼女」を見ても……

「彼女」の境遇を知っても……

「彼女」の辛さを知っても——……

それでもなお、欲しいと言えるだろうか。

「永遠の生命」が存在するこの世界で、「彼女」の存在を知ったとしたら——

これは、「永遠の生命」を持つ一人の少女と、それを守ろうと立ち上がる、一人の少年の物語——

プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

楽しんでいただけたなら幸いです。

よろしければ、感想やアドバイスなどを書いていただければ幸いです。

最後まで読んでくださり、ありがとうございました。

第一章【旅立ち】

第1話「出会い」（前書き）

第一話です。

よろしかったら読んでみてください。

第一章【旅立ち】

第1話「出会い」

“アルナト”——それは、《永遠の生命^{いのち}》を持つ人間。いや、正確には《不老の命》と言うべきかもしれない。

この【エルメス大陸】だけに存在する、特殊な種族。一定年齢よりも年をとらず、寿命で死ぬことはない。

年が止まる年齢は、各アルナトによって異なる。14歳で年が止まるアルナトもいれば、20歳で年が止まるアルナトもいる。

ただし、不死身という訳ではない。心臓を突き刺されれば死ぬし、高い崖から落ちてでも死ぬ。つまりは“年をとらない人間”だけだ。外見も普通の人間と何ら変わりはない。ただ、違いを一つだけ挙げるとすれば、アルナトは左右の瞳で色が異なっているという事。それだけだ。

また、どういった経緯や原因でアルナトが生まれるかは分かっていない。ただ、《永遠の生命》を持つが故にそれを妬む人間もいる。ある者は、《永遠の生命》を自分のものにすべく、アルナトを実験台に使い、ある者は、妬みから生じる殺意に従い、アルナト達を殺す。そういった人間達が行う、《アルナト狩り》の影響で、大陸に存在するアルナトは、ほぼ全滅。残ってるのは、大陸に数人ほどである――

パタンツ――

「ふう……」

フィエルの書庫——彼は、そこでアルナトについての書物を読んでいた。

彼の名前は、“ルイ”。“フィエルの村”に住む、ごくごく普通の少年である。

ルイの住む村、【フィエル】は、少し小さな村であった。しかし、周りは緑の自然に囲まれており、大変のどかで落ち着く村である。空気は澄み、空は汚れ一つ無い。家々に見られる風車が、のどかな風景をより一層引き立てている。

村人達は皆明るく、友好的な人ばかりで、居心地も大変良い村である。ちなみにルイは、この村の子供達の中では最年長だ。

ルイは、家で祖父と妹との3人で暮らしている。彼の両親は、ルイと彼の妹が小さい頃に死んでしまった。

なぜ死んでしまったのか、ルイは知らない。祖父であるケレンが、理由を教えてくれないのだ。何度尋ねても、ケレンは教えてくれないかった。

そしてルイは、アルナトに大変な興味を持っていた。《永遠の生命》を持つアルナト。彼らがどうやって生まれたのか、どんな生活をしているのか……そんなことばかりに気を取られ、毎日を生きていた。

だがルイは、《永遠の生命》には興味がない。興味があるのは、むしろアルナトそのものなのである。

「アルナトか……いつか出会ってみたいなあ……」

毎日のようにそう呟く。その度に、妹に呆れられているのだが……

「あーいたーおにいちゃんー！そろそろパーティー始めるよー！」

噂をすれば何とやら……ルイの妹、“ナオ”が呼んでいる。

今日は、ルイの16歳の誕生日なのだ。

ルイは、誕生日パーティーの準備をサボって、この書庫に来ていたのである。

ナオがこちらにやってきて、いつもの呆れ顔をする。

「また、アルナトについて調べてたの？ 飽きないねえ、お兄ちゃんも。」

ナオは、いつものように呆れながら言う。しかし、ルイとしては迷惑な話である。人の興味に水をささないでもらいたいと、ルイは常々思っていた。

「僕が何に興味を持とうが、ナオには関係ないだろ。」

「ふーんだ！ お兄ちゃんなんてアルナト病になっちゃえ！」

ナオはそっぽを向きながら、そう言った。

いつものやり取り。ルイとナオにとっては日課であった。

「それはいいとして、そろそろパーティーに向かうか。」

「そうよ、早く行こう！」

ルイの言葉に、ナオは“思い出した”とばかりに頷いた。

ナオはルイの耳を引っ張り、パーティー会場へと足を進めた。

「おじいちゃん、お兄ちゃん連れてきたよ。」

ナオは会場に着くなり、祖父の“ケレン”に向かってそう言った。

「ナオか。ルイも。入りなさい。パーティーの準備はできているぞ。」

ケレンは微笑みながらそう言うと、彼らを会場に迎え入れた。だが、ルイはまだナオに引つ張られた耳が痛いようで、会場に入るまでの間、ずっと自分の耳を押さえていた。

ルイとナオの祖父であるケレンは、【フィエルの村】の村長である。その優しい人柄と、しっかりした仕事ぶりが影響したらしい。実際、ルイ達にも優しく接してくれるし、仕事もきちんと頑張っている。祖父が村長になった事は正解だとルイ達は思っていた。

「おう！ルイ！誕生日おめでとさん！」

「あら、ルイ！また図書館に行ってたの？」

「ルイ、誕生日おめでとー！」

ルイが会場に入ると、すでに村の皆が揃っていた。

この村では、村人の誕生日を村全体で祝うという変わった習慣がある。この村が小さいからこそできる習慣だろう。

ちなみに、ルイはこの習慣が好きであった。嬉しいことは皆で分

かち合いたいと思っている……のは名目上で、何よりこの祭りじみた雰囲気が好きなのである。

「ありがとう、みんな」

ルイはみんなにそう言うと、指定された自分の席に着く。

会場は、この村にしては中々の広さだった。屋外の会場ではあるが、あちこちにテーブルが設置され、その上には色とりどりの料理が並べられている。

しばらくすると、会場の中心にあった台の上にケレンが立ち、挨拶を始めた。

「みんな。今日は孫の誕生日に来てくれて、本当にありがとう。今日は存分に楽しんでいってくれ。ルイ、お前もこっちに来て、一言言いなさい。」

ケレンはニコニコと笑いながら、ルイに手招きをしている。この誕生日会の主役は一応自分だということもあって、ルイは言われるがままに祖父のところへ向かった。

台の上に立ち、みんなに向かって一言。

「今日は僕の誕生日会に来てくれて、本当にありがとう！僕は騒がしいのは好きだから、みんな、ガンガン騒いじゃって！」

途端、会場は「オオーツ！」という歓声に包まれる。ルイの好きな、この雰囲気。

やっぱり誕生日はこうでなくちゃと、ルイは思っていた。

村人達は酒を飲み、料理を食べ、思う存分騒いでいるという感じだった。誕生日会の主役であるはずのルイよりも派手に騒いでいる。

結局皆、ルイの誕生日よりもこの騒ぎの方が目的なのかも知れない。そんな村人達を見て、ルイは微笑ましく思っていた。フィエルの村人は、こういった人達が大半を占めている。しかし、ルイはこんな村人達が大好きだった。

パーティーの途中、羊飼いのジルがルイに話しかけてきた。

「おう！ルイ！誕生日おめでとさん！今日は飲め！そして食べ！」

まるで自分の誕生日かのような言い草だ。

「ジルさん、今日は僕の誕生日会なんだけど・・・」

ルイは思ったことを口にするも、ジルがそんなことを気にしている様子はない。

「しかしルイ、おめえも16歳か。立派になったなもんだなあ」

ジルはそう言うと、ウオオオオンと声を上げて泣き始める。酒臭い息からも分かるが、相当酔っているのだろう。

「はいはい。ありがとな、ジルさん。」

ルイはジルさんからそそくさと離れる。このままでは自分まで酒を飲まされそうで恐かった。

村の人々の大騒ぎのお陰で、ルイは自分の誕生日だという実感が湧かないでいた。自分の誕生日なのだから、村人達よりも楽しまなくてはいけない、というなんとも微妙な使命感が、ルイの中にはあった。

「僕ももつと楽しまなきゃな。」

そう思い直し、ルイはみんなの輪の中に入って行った。

数時間後――

さすがに村人達は騒ぎすぎたようだ。先ほどまでの騒がしきは消えていた。ルイ自信も少々騒ぎすぎたらしく、少しの休憩を取るべく自分の席へと向かっていた。

ルイが自分の席に座り、ぐったりと休んでいると、再びケレンが中央の台に立ち、話し始めた。

「……村のみんなも分かっていると思うが……今日はルイの16才の誕生日だ。彼女を……見せようと思う……。」

シン――

途端、会場が静まり返る。先ほどまでの騒がしさは、微塵も残っていない。

その静けさもあつてか、ルイはあることに気付いた。

村の子供達が、いない――

会場には、ナオの姿も無かった。ルイがきよきよと辺りを見回していると、祖父がルイに向かい、話し始めた。

「ルイ……いいか。お前は、我が家の主となる子だ。お前には、運命を受け入れてもらわなくてはならん……。」

運命？一体、何のことだ？何を受け入れろって言うんだ……？そ

れに、【彼女】って誰だ・・・？

ルイには、ケレンの言葉がさっぱり分からなかった。

「じいちゃん……一体……何を……？」

「……。」

ルイは祖父に問うが、祖父は言いとどまっている。答えづらい事なのだろうか？

「……【レア】……入ってきてくれ……」

やがて意を決したかのようにケレンがそう言うと、会場の入り口から、一人の人物が入ってきた。

その少女はローブのようなものを全身に被っており、顔は確認できない。だが、体つき等から見て女性。いや、まだ少女である事が分かる。

「ルイ……。お前は今からあるものを目にする。すぐには信じられんかもしれん。……だが、これはまぎれもない真実。受け入れてくれ。」

スッ――

ローブを羽織った人物が、自分のローブに手を掛ける。そして――

ガバッ――……

ローブが中に舞い、ローブの中の人物が姿を現した。

「——!!」

ローブの中から現れたのは、一人の少女。

——少女は、美しかった。透き通るように白い、髪と肌。瞳の色は、左右で違っていた。右はルビー色、左のサファイア色。まるで二つの宝石が輝き合うようであった。そして、繊細な顔立ち。華奢な体つき。誰もが心を奪われてしまうかのような美しさである。白く儂い彼女は、童話に出てくる妖精そのものだった。

ルイが少女に目を奪われていると、ケレンは静かに、そして囁くように、口を開く。

「……彼女の名前は、“レア”……『アルナト』の少女だ……」

僕はまだ知らなかった。彼女との出会いが、僕と彼女の運命を変えてしまうことを。

そして、これから起こる悲劇と奇跡を——

第一章【旅立ち】

第1話「出会い」（後書き）

用語解説

【エルメス大陸】……この物語の舞台。広大な広さを誇る大陸。大陸自体が巨大な一つの国家となっており、大小多くの都市や村が存在する。都市同士での争いも、別段珍しくは無い。

また、かつての人間達が残した遺産である“魔法”と“ロストテクノロジー”が存在する。

永遠の種族“アルナト”が唯一存在するとされる大陸。未だ謎だらけの大陸国家である。

【フィエル】……主人公「ルイ」が住んでいる村。産業はあまり発達していない。田舎だが、非常にのどかで過ごしやすい。また、村の中央にある巨大図書館には、巨大な地下室があるらしい。伝記“運命の記憶”に出てくる神と同じ名を持つが、詳細は不明。

第一章「旅立ち」

第2話「アルナトの少女」(前書き)

大分遅くなってしまいましたが、第二話です！

第一章【旅立ち】

第2話「アルナトの少女」

「……彼女の名前は、【レア】。『アルナト』の少女だ……。」

「え……。」

祖父の突然の告白に、ルイは驚きを隠せなかった。

目の前にいる少女が、自分が長い間あこがれ続けていたアルナトだと、ケレンは確かにそう言った。

彼の言葉は理解したつもりだ。しかし、すぐに納得しろというのもルイには無理な話であった。

「そ……そんな冗談……。」

ルイは自分の動揺を隠すように、ケレンに向かって言った。

しかし、ケレンの表情は動かない。口を真一文字に結び、ルイの目をじつと見据えている。ルイは知っていた。ケレンは真面目になると、口を真一文字に結び、相手の目をじつと見る事を。そして、彼がこんな笑えない冗談など言わないことを。

「……。」

目の前にいる少女も、ルイの方をじつと見つめている。

動じもせず、怯えもせず、ただ、静かに、そして観察するようにルイを見つめていた。

そのルイを見つめる瞳は、左右で色が異なっていた。右は燃えるように赤いルビー色、左は氷のように青いサファイア色。

アルナトの特徴の一つとして、左右の瞳での色の異なりが挙げられる。目の前にいるレアという少女と同じように、アルナトの瞳は

左右で色が異なっているのだ。

その事実が、彼女がアルナトだという証拠の裏付けにもなった。

「ほ……本当に……。」

ルイの頭が次第に整理されていく。が、それに伴って心臓の鼓動も速く、そして強くなっていた。

「き、君は……アルナト……なのか……？」

「……。」

事実を確認しようと少女に確認を取るも、返答はない。彼女は相変わらず、ルイの瞳をじっと見つめていた。ルイは恐る恐るといった感じで、少女の瞳を見つめ返す。

「——！」

刹那、彼女の瞳に、一種の感情を垣間見たような気がした。喜びではなく、憎しみでもない。それは——悲しみだった。

彼女の瞳に映った、悲しみ……ルイの見間違いだっただのかもしれない。しかし、ルイの心には、「この少女から目をそらしてはいけない」という強い気持ち、そして決意が芽生えていた。

（この子は……何かを僕に訴えたいんだ。目をそらしちゃいけない。見つめ返すんだ。そして、真実を見るんだ。）

ジッ——

「——！？」

突然自分の瞳を見つめ返してきたルイに、レアも少々困惑したようだ。表情が動いた。が、すぐにその表情も元通りになり、レアは再びルイの瞳を見つめだした。

ルイとレアは、無言で見つめ合った。互いの瞳の中に隠された真実を模索しよう。が、それは一筋縄でいくものではない。多大な根気、そして慈愛が必要だった。

ジッ——

彼女に表情は無い。傍から見れば、ただの無表情である。だが、彼女が一瞬見せたあの表情——あれが、見間違いでないとすれば、

（絶対に、何かある。この少女には、感情がある。）

ルイは、さらにジッとレアの瞳を見つめた。

だが、一向に何かを掴むことはできなかった。過ぎていくのは、時間のみ。だが——

ニコッ——

「……！？え……？」

途端、レアが笑みをこぼした。

ルイの苦労を察しての事だろうか。ルイには全く分からなかった。

そしてレアはルイの元へ、トコトコと小走りで向かい、目の前で止まった。

「私……レア……。」

途切れ途切れにレアの口から発せられる言葉は、自己紹介だった。

「あ……！えつと……僕はルイ。よろしくね。」

つられてルイも自己紹介を返す。

ニコッ――

レアは再び笑みをこぼした。なぜ突然笑顔になったのか、ルイには理解できなかった。だが、レアの笑顔はとても温かく、あらゆるものを癒す力があるとルイは思った。

「――レアも、ルイを認めたようだな。」

ケレンが二人の間に割り込むように、口を挟む。
良い機会だと思い、ルイは自分の疑問をぶつける事にした。

「じいちゃん。教えてくれ。なんで、この村にアルナトが？それに、
どうして俺だけに見せて、他の子供には見せないんだ？」

ルイのその疑問にもケレンは動じることなく、

「そう思うのも当たり前だな。順を追って話そう。」

そう言つと、ルイに向かって話し始めた。

「先刻も言ったが、レアはアルナトだ。まずはどうしてアルナトが

この村にいるかだが——ルイ。お前には、お前の両親の話をしたことがなかったな？」

ケレンはルイに尋ねた。いや、訪ねたというより、確認と言っべきかもしれない。

「うん。ないよ。僕が聞いても、じいちゃんは教えてくれなかった……。」

若干の皮肉をこめて、ルイは言った。考えてみれば、この年になるまで両親の死の原因を知らされていなかったのだ。なんとも酷な話である。

「……お前の両親は、大の旅好きでな。ヒマを見つけては、あらゆる地方に旅をしておった。幼いお前やナオを私に預けてまで旅に出ていたほどだ。あいつら自信、お前とナオが大きくなったら一緒に旅に行きたいと言っておった……。」

「……。」

ルイは、両親が旅好きだったという事実を全く知らなかった。だが、無理もない。彼の両親が亡くなったのは、まだ彼が本当に幼かった時の事である。

しかし、ルイは自分の両親についての思い出の乏しさを改めて実感していた。

「そしてあれは十四年前……まだお前が三歳、ナオが二歳の時の事だ……お前の両親は、旅先から一人の少女を連れてこの村に戻ってきた。……それがレアだ。」

「……!!」

レアは、ルイの両親が連れてきたものとケレンは言った。
その事実には、ルイは驚きを隠せなかった。

「どこで知り合ったのか、なぜ連れてきたのか、それらの事は聞か
されていない。レアを連れて帰ってくるや否や、【この子をこの村
で保護してくれ】などと言いおった。お前の両親を信用しておった
フィエルの村は、言われるがままにレアを保護した。レアがアルナ
トだと知っても、村人は差別なくレアを大切にした。だが、アルナ
トは【アルナト狩り】に狙われている。だから、信用できる16歳
以上の村人だけで保護することに決めたのだ。もしもすっかり口外
してしまつては、大変なことになりかねないからな。」

それは賢明な判断だとルイは思った。子供を信用していないわけ
ではないが、万が一という事も有り得なくは無い。本当にレアの事
を大切に思つての判断だろう。

「しかし、レアはなかなか笑顔を見せなかった。まるで自分の心の
闇に打ち負けているように、感情というものが存在しなかったのだ。
言葉も何も話してはくれない。……だが、お前の両親は、そんなレ
アと必死にコミュニケーションをとろうとした。その成果もあつて
か、段々ではあるが、レアにも感情らしきものが芽生え、多少だが
口も開くようになった……あの日まではな……。」

ケレンの話が、そこで止まる。

「あの日……??」

「……。」

ルイが聞き返すが、ケレンは黙ったままだ。その日に、何があったというのだろうか。ルイは、妙な不安と胸騒ぎに襲われた……。

「アルナトがいるとの情報が入っただと!？」

黒いローブに黒いトップ、そして黒いズボン。全身黒ずくめのその男は、同じく黒ずくめの男に問い質した。

「はい、ゴールド様。【ミラ】のレーダーに反応がありました。恐らくは確実な情報だと。」

口調から手下だろうと予想できる男は、淡々と答えた。

「そうか……場所はどこだ？」

「はい。【フィエルの村】です。」

ゴールドと呼ばれる男の質問に、手下の男が答える。

「やっと見つけたぞ……アルナトの生き残り……クッククク……待っている……。」

不気味に笑うゴールドの手には、歪で巨大な——大剣が握られていた。

第一章【旅立ち】

第3話「ルイの提案」(前書き)

感想、評価などいただけたら幸いです^^

第一章【旅立ち】

第3話「ルイの提案」

「【あの日】って何なんだ？ 一体……何が起きたって言うんだ……？」

ルイは再びケレンに尋ねた。

「……。」

ケレンは押し黙っている。それほど言いづらいのだろうか？ 【あの日】とやらに、一体何があったというのだろうか。

「く……。」

ケレンは已然押し黙ったままだ。顔中に汗をかき、顔は青ざめているように見える。これ以上ケレンに無理をさせるのも酷だな、とルイは思った。

「……話したくないんなら、まだ話さなくてもいいよ。でも、いつかは話して。僕だって父さんや母さんのこと、もっと知りたい。だって、何も知らないんだから……。」

ケレンは驚きと安堵、そして罪悪感の入り混じった表情でルイを見ると、

「……！……ああ。すまない……本当にすまない……。」

そう言って、ルイの提案をありがたく受諾することにした。

（両親の話は、また後で聞けばいい。残念だったけど……あせる必要はないよな。）

ルイはそう自分に言い聞かせ、ケレンにこれからの事を訪ねた。

「で、じいちゃん。僕にレアを見せたってことは、何かあるんですよ。僕は何をすればいいの？」

ルイはチラッとレアのほうを見る。レアは、地面からひょっこりと出ている草の芽を、ジッと見つめていた。何かをジッと見つめるのがレアの癖なのだろうか。ルイにはその光景が、とても微笑ましいものに見えた。

「……うむ。ルイも十六歳になったことだ。今日から、レアの世話をやってもらおうと思ってな。」

ケレンは表情を直すと、そう言った。

「えっ！？僕が！？ど……どうして！？」

あまりに急な事態に驚いたルイは、動揺を隠しきれず、ケレンに尋ねた。

「レアは、あくまでお前達の両親が連れてきて、お前達の両親が育てていたんだ。息子であるお前が引き継ぐのは当然だろう？」

さも当然だというように、ケレンは言った。

アルナトの世話ができる。アルナトと友達になれる。ルイにとっては願ってもみないことだった。アルナトはルイにとって、ずっと

憧れの的だったのだ。嬉しいのは当然である。

しかし、突然の事態は、ルイに喜びよりも不安を与えた。

「でも……僕、自信ないよ……レアとどう接していいのかも分からないし……。」

ルイは、自分の中に渦巻く不安をケレンにぶつけた。アルナトの世話。やりたいとは思うが、果たして自分に出来るだろうか？もし自分が世話をする事で、レアを危険にさらしてしまうのなら、やらない方がよいのではないか？ルイは、そう思っていたのだ。

しかしケレンは、ルイの言葉を聞き、頬を歪めると、

「大丈夫だ。ルイならば、レアを世話することができさ。」

と言った。

その言葉に、ルイは少々不満を感じた。根拠もなく、どうしてそう言い切れるのか。

「なんで証拠もないのにそう言い切れるのさ。」

ルイは思ったことを口にした。なぜそう思えるのかを、ケレンから直接聞きたかったのだ。

「……レアが笑顔を見せたのは、14年ぶりだからだ。」

「……えっ？」

ルイにはケレンの言葉の意味が良く分からなかった。

笑ったのが14年ぶり？14年前って言ったら、「あの日」の事だ。

「……レアは、14年前、お前の両親が亡くなってからというもの、笑顔を失った。何を見ても、何を聞いても、全く笑おうとはしなかった。」

「……。」

ケレンの言葉が、ルイには俄かに信じ難かった。

「だから、ワシは驚きと希望を持った。お前は心に、真の優しさを持っている。お前ならば、レアを幸せにしてやれるのではないかな。だから……頼めるか？」

ルイは考える。本当に良いのか。僕がレアの世話をしたら、逆にレアを不幸にしてしまうんじゃないか？

ルイは再びレアの方を見る。

レアは僕の視線に気付くと、ニコツと微笑んだ。

そうだ。

失くしちゃいけない。

この笑顔を、失くしちゃいけないんだ。

「……分かったよ、じいちゃん。僕、レアの世話係を引き受ける。」

ルイは覚悟を決め、そう言った。

「そうか。……レアを、頼んだぞ。」

ケレンはルイに微笑むみながら、そう言った。

「ただし……」

と、ケレンが付け加えて何か言おうとしている。

「村の子供達には見つかるな。絶対だ。特にナオには注意するんだ。あの子の変な所で鋭いからな。それとレアは普段、村の図書館の隠し扉から通じる地下室にいる。世話をするときは、そこに行くんだ。」

いつもアルナトの事を調べに行っていた図書館に、まさか本物のアルナトがいたとは。その事実、ルイはちよつとした皮肉を感じずにはいらなかった。

「うん、分かった。」

事が決まるにつれ、ルイの「嬉しい」という気持ちがあふれ出してくる。

今までは憧れの存在でしかなかったアルナト。

出会えればいいと思っていたアルナト。

まさか自分が、その世話をすることになるとは。

ルイはレアに走り寄り、レアに言った。

「これからよろしくね、レア。」

するとレアはニコツと微笑んで

「……よろしく。」

と一言。

これから、僕の新しい生活が始まる。レアと一緒に過ごす、楽しい日々が。

ルイはこれからのことに思いを馳せ、ひとり頬を緩ませるのだった。

第一章【旅立ち】

第3話「ルイの提案」(後書き)

アルナトの世話――

「んじゃ、行きますか……」

地下室――

「……開けてみよう。」

食欲――

「じーーーーーっ……」

孤独――

「……また、来て……?」

そして、新たな生活の幕開け

次回 第四話 「レアのお世話」

第一章【旅立ち】

第4話 「レアのお世話」(前書き)

感想、評価などいただけたら光栄です。

第一章【旅立ち】 第4話 「レアのお世話」

誕生日の翌日——夜中の十二時。

ルイは、フィエルの図書館にいた。もちろん、レアの世話をするためである。

食事を持っていたり、洗濯物の処理をしたり、入浴の手伝いをしたり……といったことをするようだ。

ケレンの話だと、この図書館の隠し扉から通じる地下室に、レアはいるらしい。

最初は、村の子供達に見つかってしまっているのではないかと心配だった。だが、こんな真夜中では子供達も寝静まっているのだろう。誰にも気付かれる事はなかった。一番の心配だったナオも、どうやら熟睡しているようだった。ひとまず安心といったところか。

「えっと……隠し扉は……。」

隠し扉の大体の場所は、ケレンから聞いている。だが、真夜中である為、館内は真っ暗だった。そのため、それを探すのにさえ少々の手間を必要とした。

「ん……と。どこだ……どこだ……ん……？お、あったぞ。あれかな？」

ルイは、図書館の奥にひっそりと佇む、ひとつの扉を発見した。なるほど。目立たぬようにひっそりと、さらに布を被せて発見を防いでいる。これでは、最初からあると認識していない限り、見つけるのは困難だろう。

ギィ……

「うわぁ……。」

ルイが扉を開けると、地下へと続く階段が現れた。随分と深いのか、明かりで照らしても底は見えない。それが、何とも言えぬ不気味さを醸し出していた。

「んじゃ、行きますか……。」

ルイは覚悟を決めて、階段を下りた。

コツ……コツ……コツ……

薄暗い階段に、ルイの足音だけが不気味に響く。

壁の侵食から、この地下室自体は随分と古いものようだ。さらに、壁には草のツタを思わせるような紋様が所々に刻まれている。

……何かの儀式に使われたのだろうか。

そんなことを考えているうちに階段を下り終え、広い廊下に出る。廊下は、かなり奥のほうまで続いていた。

ルイは、レアの部屋を探すべく、廊下を歩く。

階段と同じく廊下も長いらしい。明かりで照らしても、一番奥が見えることは無かった。

「おっと……ここかな？」

しばらく歩くと、ルイは目の前に、ひとつの扉を発見する。
他の扉とは、明らかに違う装飾。

「……開けてみよう。」

ルイは扉に向かって手を伸ばし、おもむろに開く――

ガチャ――……

――その部屋は、中々の広さを誇っていた。さらには大きなベッド、ろうそく、そしてテーブル、ドレッサーなど、大方の生活に必要なものが揃っていた。また、最近使った形跡もある。

……間違いない。ここが、レアの部屋だ。

「レアー？ いるかい？」

呼んでみるが、返事は無い。

おかしいなあ、と思いつつ、ベッドに近づいてみる。すると――

「すう……すう……」

いた――

レアは、ベッドで熟睡していた。すう、すう、と規則的に寝息を立てている。その寝顔は、妖精のように美しかった。

やはり、マジマジと見てみると、レアの顔と体は幼い。人間で言えば……12、13歳くらいだろうか。そうになると、レアは12、13歳程度で歳が止まったことになる。こんなにも幼い外見の少女が、自分よりもずっと長い間生きているのだということを、ルイは信じられなかった。

だが、その事実は彼女がアルナトだということを証明していた。

「ん……」

レアの睫毛が、ピクリと動く。起こしてしまったのだろうか。

「ん……んあ……ふあ……」

レアはベッドから体を起こすと、眠そうに瞼を擦り、大きなあくびをした。

「おはよう、レア。目覚めはどう？」

「……ん……。」

ルイが尋ねると、レアは相変わらず眠そうに短く答えた。
「やっぱ、まともに会話するにはまだ早いかな。と、密かにルイは思っていた。」

「じーーーーっ……」

突如、レアの視線が、ルイに向けられる。

「な、何だよレア。そんなに見つめられたら恥ずかしいじゃないか・
・」

レアの突然の見つめ攻撃に、ルイは若干動揺してしまう。

「じーーーーっ……」

それでもレアの視線は逸れることなく、ルイのいる場所を的確に

捉えていた。

「レ、レア……。」

「じーーーーー……」

レアの視線に耐え切れなくなったルイは、食事を乗せたお盆を机の上に置き、レアに近づこうとする。

「……！じーーーーー……」

が、レアの視線は、今度はルイがお盆を載せた机に向けられていた。

「え……？まさか……。」

次にルイは、机に置いたお盆を、床に置いた。

するとどうだろう。レアの視線は、今度は床に向けられる。

そう。レアは、「ルイ」ではなく「ルイの持ってきた食事」を見つめていたのである。

「あはは……レアでも食い気には勝てないか……。」

ルイはそういつつも、少々残念そうである。

「じーーーーー……」

レアは、尚も食事を眺め続けている。

「はいはい。分かったよ。分けるから、ちょっと待っててね。」

ルイは持ってきた食事の中から、レアの分を分けた。

「どうぞ。おかわりもあるから、どんどん食べてね。」

「……うん。」

レアはそう言うと、ルイが持ってきた食事を、実に美味しそうに食べ始めた。

数分が立ち、やがてレアの食事も終わる。

ルイはコミュニケーションを取るべく、レアに話しかけた。

「レア、最近どうだい？」

特に意味も無く、ルイはそう尋ねた。

「……何が……？」

案の定な返事。もっとも今の質問では、誰もがそう聞き返すだろうが。ネタも無く話しかけても、レアにはやはり通じるはずが無い。

「ん……毎日楽しいかなって……」

「……。」

ルイの問いに、レアは突然黙ってしまふ。

……考えて見れば、レアはこんな地下室に毎日一人ぼっちだ。楽しいはずなど、ある訳が無いではないか。

ルイはこの空気を打開すべく、話題を変えることにした。

「そ、そうだ！レア！お風呂に入ろう。用意してあるから。」

「……！うん……！」

レアの顔に、少し輝きが戻ったような気がする。レアは入浴が好きなのだろうか。

ともかく、レアの顔に笑顔が戻ったことは一安心だった。

ルイとレアは、図書館に設備されている浴場に向かった。

「へえ……ここが図書館の浴場か。結構大きいんだな。」

ルイは、この浴場を見るのは初めてだった。結構な大きさである。後は、レアを入れさせるだけなのだが……。

「レアー！僕は外で待っているから入って——！？」

ぬぎぬぎ……

「〜」

ルイの退出を待つこと無く、レアはもう既に服を脱ぎ始めていた。

「レ、レア！まだ僕がいるのに！」

「……？」

ルイはそういうが、レアは何の事だと言わんばかりに首をかしげている。

「も……もう！」

ルイは、レアの一糸纏わぬ裸体を見ないよう目を塞ぎながら、すばやく浴場を後にした。

「まずは……常識を教えなきゃかなあ。」

やがてレアの入浴も終わり、ルイ達はレアの部屋に戻ってきた。

「……はあ……。」

レアは先程から、気持ち良さそうなため息を吐いていた。どうやらご機嫌なようだ。やっぱりお風呂が好きだったらしい。

「大変だったけど、楽しかったよ。ありがとう。レア。」

ルイは、レアにそうお礼を言った。

そうなのだ。慌ただしくはあったが、実際、楽しかった。こんな毎日が続いたらいいなと思えるほどだった。

「……うん……！」

レアはうなずいて、にこりと笑った。ルイはこの笑顔がたまらなく好きだった。

ふと気がついてみると、結構な時間が経っていた。

「さて、じゃ、僕もそろそろ行くよ。またね。」

そう言って、ルイは部屋から出て行こうとする。しかし――

ガシッ――

「え？」

部屋を出ようとするルイの手を、レアはしっかりと掴んでいた。

「・・・また、来て・・・？」

ルイにはレアの言葉が嬉しかった。

ルイはレアに微笑み返し、優しく言った。

「うん。約束する。また明日来るよ。」

ルイがそう言うと、レアは安心したように、掴んでいた手を離れた。

「じゃあね、レア。」

ルイはレアに手を振り、部屋を後にした。

温かみのあるレアの部屋を出た途端、地下室の冷たい空気がレアに纏わり付いた。

コツ……コツ……。

再び地下室に響き渡る、ルイの足音。その足音は、何とも言えぬ孤独感を醸し出していた。

そんな中、ルイはふと思った。

レアは、すごく寂しかったんじゃないだろうか。こんな地下室に、14年間も一人きりで過ごしていたのだから。彼女は孤独だったのだろう。家族もいなければ、友達も、何かを教えてくれる先生もない。

……ならば、僕がなろう。

レアの家族であり――

友達であり――

先生である存在に。

そう決意して、ルイは地上に戻っていったのだった。

第一章【旅立ち】

第4話 「レアのお世話」 （後書き）

次回予告

縛れていく糸――

「今日は少し遅くなっちゃってゴメンね。ナオを振り切るのが大変でさ。」

彼女は僕の予想以上に鋭かった――

「お兄ちゃん！私に何か隠してない！？」

そして、守りたいもの――

「一体、何を隠してるのよ、お兄ちゃん……」

そして彼女は、一線を越える――

「お……おにい……ちゃん……」

次回 第五話「発覚」

第一章【旅立ち】

第5話 「発覚」

コッ……コッ……

レアの世話を始めて、一週間。ルイは今日も決まった時間に地下室に行く。レアの世話は、昼と夜の二回行うことになっている。この階段を下りるのは、今回で何回目だろうか。

はじめは薄暗く不気味に感じた地下室にも、ルイはもう慣れてしまった。

ガチャ――

「レア、お待たせ！」

「……！！」

ルイが扉を開けると、部屋のベッドでくつろいでいたレアが、笑顔でやってくる。

「今日は少し遅くなっちゃってゴメンね。ナオを振り切るのが大変でさ。」

そう。実は最近、ルイの行動に、ナオが感付きつつあるのだ。今晚もルイがレアの元に向かおうとすると、ナオは「お兄ちゃん、どこに行くの？」と訝しげな顔を浮かべた。このままではバレるのも時間の問題だ。

……何か策を考えなくてはならない。

「ナオ……？」

レアは首を傾げながら、訪ねるように言葉を発した。

「あ、そうか。レアにはまだナオのことを話してなかったよね。」

「だあれ……？」

レアがルイに顔を近づけ、早く話してくれと言わんばかりにぴよんぴよんと跳ねている。ルイにはその動作が仔犬のように見え、とても可愛らしく感じた。

「んつと……。ナオっていうのは、僕の妹だよ。普段は明るくて優しいんだけど、好奇心旺盛だね……。自分が興味を持ったことには首を突っ込まずにいられないんだ。」

レアはルイの目をジーツと見ながら話を聞いていた。分かっているのだからいいのだからよく分からない。

「あ、でも、決して嫌な子じゃないんだよ！？本当、普段は優しいんだ。僕の世話も良くしてくれるし、見ていて明るくなれるっていいか……。ホント、どっちが年上なんだって感じで……。あはは……」

ジーツ……

レアは依然としてルイの目を見続けていた。この子は本当に分かっているのだろうか、とルイは心の中で思った。

「それよりも、はい、食事！」

ルイはお盆に載った食事の中から小皿によそってレアに与える。

途端にレアは表情を明るくさせた。

「おかわりは沢山あるから、沢山食べてね。」

「……うんっ！」

そう言うと、レアは微笑みながら食事を始めた。

（ホント、幸せそうだなあ・・・僕と話するときもコレくらい幸せそうな顔をしてくれたらなあ……って、まだ一週間だし、贅沢だよな。）

「……？」

ルイがレアの方を見ていると、レアは首をかしげながらルイを見つめ返してくる。

きょんとした顔が何とも可愛らしかった。

食事を終わると、レアは、ベッドに座っているルイの元へと駆け寄ってきた。そして、彼の横で横になってしまう。

「こら、レア。食べてすぐに寝るとウシになるぞ。」

食べた後に横になりたい気持ちは、ルイにも痛いほど分かるが（ルイも食後に横になっていて良くナオに怒られた。）、ここは健康のため、心を鬼にしてレアを注意することにした。

「……はい。」

レアは素直にそう言つと、自分の体をぴょんと跳ね起こす。

「さて、それじゃあ、お風呂に行こうか。」

「うん……!」

ルイとレアは部屋を出ると、浴場へと向かった。

「は……。」

扉越しに、レアの気持ちよさそうな声が聞こえる。レアは本当にお風呂に入るのが好きらしい。入浴時間はいつも長く、出た後はどうも気持ちよさそうな顔をしている。

「あ……眠くなってきた……。」

一方、レアが風呂から出るのを待っているルイにとっては、待っている時間は中々に苦痛だった。ただでさえ遅い時間に、じっと待っているのだ。眠くてたまらない。

時には眠気を紛らわせるためにストレッチや腿上げ、腕立て伏せ、腹筋、背筋、etc……色々やったが、終わると疲れて余計眠くなってしまうので、むしろ逆効果だった。

「うっ……眠い……」

眠気は着々とルイの意識を蝕んでいった。

でも、ちゃんとレアを迎えてあげなきゃな。こんな眠そうな顔してたんじゃない、レアに失礼だ。せめて僕といるときくらい、楽しい気分であって欲しいから。

ルイはそう思いなおすと、自分の頬をバシバシと叩き、眠気無理やり振り払った。

「……おまたせ。」

レアが服を纏い、浴場から出てくる。一回目にルイが注意して依頼、裸のまま出でくるということは無くなった。

「よし、じゃ、部屋に戻ろうか。」

ルイは笑顔でレアを迎える。その笑顔は、眠気を一切感じさせないものとなっていた。やがて二人は手を繋ぎ、部屋へと戻っていた。

「お兄ちゃん！私に何か隠してない！？」

朝——朝食の途中、ナオが突然、ルイにそう尋ねた。

「へー！？……べ、別に何も隠してないよ！」

ルイは必死にそう答える。が、明らかに怪しい。

「嘘だ！お兄ちゃん、すぐ顔に出るもん！」

ナオの追求は止まらない。昔からそうだった。ルイが何か隠し事をしても、ナオには必ず見つかってしまう。それは、ルイが嘘をつくのが苦手ということもあったが、ナオの好奇心の強さが大きく関わっていた。

「と、とにかく何でもないから……」

「む……」

ナオが頬を膨らませながらルイを睨む。

「い、いや……あの……」

ナオの顔がどんどんルイに近づく。これはまずいとルイの心が警告した。

「あ！そ、そうだ！僕、勉強やらなきゃ！ナ、ナオ、また後でね！」

ルイはそう口実を作ると、さっさと部屋から出て行ってしまった。

「怪しい……。」

誰もいなくなった部屋で、ナオは一人考えていた。

兄は、昔から隠し事が下手だ。あの顔は、絶対に何か隠してる。それに、夜な夜などどこかに行くなんて、怪しすぎる。

「一体、何を隠してるのよ、お兄ちゃん……。」

兄は、すぐに無理をする。私が目を離すと、必ず無理をしている。私はそれが嫌だった。

「こうなったら……夜、お兄ちゃんの後をつけていくしかない……。」

ナオは決意した。
だって……私はもう、お兄ちゃんに無理をさせたくないから。

「よし……行くかな……。」

ルイは支度を終わると、皆が寝静まっていることを確認し、家を出た。

これだけはバレる訳にはいかない。バレてしまえば、レアの命に関わるかもしれないのだから。

だが、ルイは気が付かなかった。一つの影が、ルイの後を追っていることに。

ルイはいつも通り図書館に着くと、隠し扉へと向かった。
相変わらず薄暗く不気味な階段を下りる。両手にはレアに与える食事を持っているので、走って下りることはできない。

ルイの後を追っていたナオも、ルイに見つかからないよう、一定感覚以上の距離を保ったまま後をつけていた。それでもルイは時々後ろを振り返り、誰かがついてきていないか確認をしていた。いつもなら無用心な兄がここまで用心するのは怪しい。一体この先に、何があるというのだろうか。

それにしても、一体、どこまで下りるのだろうか。薄暗く不気味な階段は、幽霊などの類が苦手なナオに対し、恐怖しか与えなかった。

だが、兄を想う気持ちは、こんなものに負けて良い筈が無い。いつもなら幽霊の話を聞いただけで腰を抜かす私だけど、今日だけは違う。私は、兄を守りたい。ずっと一緒にいてもらいたいから――

ナオは決意を固めると、自分の頬を叩き気合を入れ直す。

「うん……大丈夫……行こう。」

ナオは呟くと、再びルイの後を追った。

「レア！お待たせ！」

ドサッ！

ルイがレアの部屋に入ると、レアは「待ってました」と言わんばかりにルイに飛びついた。

「うわっ！レア！慌てないでよ！すぐに分けてあげるから。ちょっと待っててね。」

いつもの事ではあるが、飛びつかれたときに食事をこぼさないようにするのは中々難しいのだ。

レアはこれまたいつもと同じように目を輝かせながら、ルイが食事を分けるのを待っている。

「まったく……レアったら……。」

そう言いながらも、レアの可愛い動作についつい頬を緩めてしまう自分に気付く。

「おまたせ！」

「わーい！」

ルイが食事を与えると、レアは待ってましたとばかりに食べ始めた。

（それにしても、本当においしそうに食べるなあ……。）

実に幸せそうに食事をするレアを、じっと見つめるルイ。いつもは見つめられる立場のルイだが、食事の時ばかりは立場が逆転する。

「……??」

そんなルイを見て、レアは首を傾げた。そして、フォークをルイの方に向けて、

「……食べたい？」

と聞いてきた。

「い、いや！いいよ！それはレアのだから、遠慮しないで食べてね。」

そんなに物欲しげな表情をしていただろうか。ルイは自分の顔を慌てて直し、再びレアを見る。

美しくサラサラとした白い髪、透けるように綺麗な白い肌、左右で色の異なる、サファイア色とルビー色の瞳。そして、華奢な体。

こんなにも美しい彼女が、なぜ堂々と生きることを許されないのだろう。

彼女は確かにアルナトだが、人間だ。食べて寝て、お風呂に入って、遊んで……人間と何も変わらない。それなのに……どうして彼女はこんな地下でコソコソと暮らさなければならぬんだ。

「ごめんね、レア……」

ルイは独り言のようにそう呟く。

「……えっ??」

どうやらレアに聞こえてしまったらしい。

「な、何でもないよ、何でも……」

ルイは慌ててごまかす。こんな悲しい事を考えてはいけない。せめて自分という時くらいは、人間として接してあげたいから。
だがレアは、ルイの悲しい表情に気付いたのだろうか。食事をそのままにして、ルイに近づくと、ルイの頭を撫で始めた。

「いい子……いい子……」

「あ……。」

レアの手は、優しく、柔らかかった。

自分よりも幼く見えるレアにこうしてもらうのは少し恥ずかしかったが、この手にもう少し甘えていたかった。

「あはは……変だよね、僕が逆に甘えさせてもらってるなんて……。」

「

「私も……いつも甘えさせてもらってる……。」

レアの言葉の温もりを心で、手の温もりを頭で感じ、ルイはとても幸せな気分浸っていた。と、同時に激しい眠気がルイを襲う。

（いけない……眠い……。）

ルイは、絶対に寝まいと睡魔に抵抗した。

だが、ルイの意思などお構いなしに、眠気は次々に襲ってくる。
やがてルイが睡魔に敗れ、安眠の淵へと身を任せようとしたとき

バタンッ！！

扉が思い切り閉まる音がした。その大きな音に、ルイの意識は一瞬で覚醒する。

「な、なんだ!？」

閉まったドアの前には、人が立っていた。
本来、ここにはいけないはずの人が――

「お……おにい……ちゃん……。」

見覚えのある顔、見覚えのある声。扉の前に立っていたのは――
――ナオだった。

「ナ……ナオ……!」

第一章【旅立ち】

第6話 「穏やかなる調和」

「ナ……ナオ……！」

どうしてここにナオがいるのだ。ここへの入り口は、自分しか知らないはず。まさか……つけられたのか。

ルイの頭は混乱していた。本来、ここに居てはいけない人物の登場に、動揺を隠し切れない。

「お兄ちゃん……これ……どういう事……？その子、誰……？」

まずい、何とかしなければ。

ルイは必死で言い訳を考えるが、頭の混乱と同様で、どうしても良い言い訳が思い付かない。まさに、万事休すだった。

「か、彼女は僕の友達で……」

我ながらバカな言い訳をしたと、ルイは思った。

「どうして友達が地下にいるの……？」

「そ、それは……」

ナオの言葉に、ルイは何も言い返すことが出来なかった。
今のルイでは、何を言ったところで墓穴を掘ってしまうだけだ。

「……ッ！」

ナオがレアを見て、何かに気付いたようだ。

目を細め、レアをまじまじと見るナオ。その表情は、驚きと混乱が入り混じっているようだった。

「……左右の瞳の色が……まさか、その子……アルナト……」

「……！」

こういった時のナオは、とてつもなく鋭い。いつも以上の観察力と注意力を持っている。もう、言い逃れる事など不可能に近かった。

（ど、どうすれば……）

考えるが、今のルイの頭では良い案など思いつくはずも無かったが、一応の思考力だけはあったらしく、ある考えを思いついていた。

「一度、おじいちゃんの所に行こう。」

「……分かった。」

そう言うと、ルイとナオは、レアの部屋を後にした。

部屋には、不思議そうに首を傾げたレアだけが残された。

「……見つかってしまったか。」

「ゴメン……おじいちゃん……」

ルイは顔を伏せ、先ほどからずっと謝っていた。

一方ナオは、ケレンの顔から目を離さず、ジッと見つめていた。

「まあ……ナオは鋭いからな。いつかはこんな日が来てしまうのではないかと思っていたよ。」

ケレンは穏やかな顔でそう言った。

思い切り怒られると思っていたルイは、ケレンの意外な態度に驚きを隠せなかった。

「どうして、私に隠していたの!？」

突然、ナオが声を張り上げて言った。

ナオの態度に、ケレンは「ふむ」と一声あげると、

「……ナオにも話そう。レアの事をな……。」

静かにそう言った。

「そうだったの……」

全ての話を聞いたナオは、驚きを隠せない様子だった。

今までレアが味わってきた苦痛、悲しみ、悲劇……それらに触れ、人一倍感受性の強いナオは、心から同情したようだ。

「私も、これからはお世話を手伝っても良い？」

感受性と共に、母性本能も人一倍強いナオは、ケレンに問う。その問いに、ケレンはにっこりと笑って言った。

「ああ。よろしく頼むよ。……ただし……。」

ケレンはキツと表情を厳しくし、続けた。

「絶対に、見つかつてはいけないぞ。」

ケレンのその言葉に、ナオは表情を引き締める。

「うん！努力する！」

こうして、ナオもレアの世話に参加する事となった。

ナオならば、しっかりと世話をしてくれるだろうと、ルイも安心していた。

それに、レアに一人友達が増えることになる。それは、ルイにとっても非常に嬉しい事だった。

だが、この胸騒ぎは何だろう。

ルイは喜びと同時に、妙な胸騒ぎを感じていた。

「レア、紹介するよ。僕の妹、ナオだ。」

ルイは、早速レアにナオを紹介する事にした。

「は、はじめまして！ナオです！よ、よろしくね。」

ナオは、柄にも無く緊張しているようだった。

そんな様子が可笑しくて、ついついルイは笑いを漏らしてしまう。

「な、何よ!」

「ごめん、何でもない。けど、ナオが緊張してるなんて……
ははは。」

そんなルイの態度に腹を立てたのが、ナオはルイの足を思い切り
踏みつけた。

ギュツ——!

「い、いたたたたた。」

「クスクス……」

そんなルイとナオの様子を見て、レアはクスクスと笑っている。

「も、もう。お兄ちゃんのせいで、笑われちゃったじゃない。」

「あはは。ごめん、悪かったよ。」

だが、結果的にはナオとレアが触れ合うきっかけとなった。これ
で良かったのかもしれないな、とルイは思っていた。

「それじゃ、早速仕事しようか!」

「うん!」

ナオは、ルイが思った以上に頑張ってくれた。

ルイはレアと一緒に風呂には入れないので、代わりにナオが一緒に入る事となった。これで、入浴中にもレアに寂しい思いをさせることは無い。

そして、洗濯や掃除。こういう面では男であるルイよりも、女性であるナオの方が能力を発揮するらしい。

「ナオが来てくれて、本当に助かったよ。」

「そう？エヘヘ……なんだか照れちゃうな。」

ナオは、ルイが褒めると直ぐにデレっとなってしまう。これで、先ほどのルイの不祥事も許してくれるだろうか。

「むかしむかし、ある所に……」

一通りの仕事も終わり、ナオは、レアに本を読み聞かせていた。レアは、興味津々と言った様子で、ナオの話に耳を傾けている。

ルイは、そんな二人の様子を、レアのベッドの上から見守っていた。

（二人とも、もうあんなに仲が良さそうだ。きっとレアも喜んでる。ナオが来てくれて、本当に良かったよ。）

ルイがそんな事を思っていると、ナオに本を読み聞かせてもらっているレアが、ルイの所へと歩み寄ってきた。

「ん？どうかしたの？レア？」

レアの突然の行動に、驚きを隠せないルイ。

「一緒に、本読もう………？」

レアはそう言うと、ルイの腕を引っ張り、ナオが待っているところまで連れてきてしまう。

「わ、わざわざその為に？」

「……うん。」

ルイは、レアの行動に驚いていた。

本を読んでもらっているのを中断してまで、ルイと一緒に本を読みたかったレア。そんな彼女の気持ちに触れ、ルイは驚きと同時に喜びも感じていた。

「そうだね。それじゃ、一緒に読もうか。」

「……うん！」

ルイがそう言うと、レアはにっこりと笑顔を浮かべ、再びナオの話に耳を傾け始めた。

「それじゃ、そろそろ行こうか、ナオ。」

「そうだね。」

ルイとナオは、地下室から帰ろうとしていた。これ以上いては、流石に睡眠時間が削られてしまうし、明日も仕事はある。寂しいが、仕方の無いことだ。

「また……来て……？」

レアが寂しそうな表情で、二人に言った。

「もちろんだよ。毎日来るから、安心してね。」

「私も来るよ。だから、少しだけ我慢しててね。」

ナオはそう言うと、レアの頭を優しく撫でた。レアはくすぐったそうに身を縮め、ナオの手の感触に身を任せていた。

「それじゃあね、レア。」

「バイバイ！」

ボタンツ――

鈍い音を立てて、扉が閉まる。

ルイは、この瞬間が嫌いだった。ルイが、レアと離れなくてはならない時間。そして、レアが一人ぼっちに戻ってしまう時間。

できれば、この時間はこないで欲しい。しかし、これは仕方の無い事。

ルイは、毎日そう自分に言い聞かせていた。

「フィエルの村……もうすぐだな。」

フィエルの村から、少し離れた山道——ゴールドは、そこで休憩を取っていた。何しろ一日中歩きっぱなしだ。いくら身体能力を強化したゴールドとはいえ、疲れは感じる。

「ゴールド様。明日には、フィエルの村に到着できるかと。」

黒いフードを被った男が、ゴールドに言った。その男の右手には、槍を思わせる武器が握られている。

「そうか。ご苦労だった。お前も今日は休んでおけ。」

「はっ！」

ゴールドの言葉に、フードの男は声高く返事をする、ゴールドの元から離れていった。

見れば、ゴールドの周りには、黒いフードを被った男達が、約5人それぞれが、右手に歪な武器を構え、立っていた。

「さあ、全員今日は休め！明日は……多くの血が飛び交う事になるだろうからな。」

ゴールドは自分の大剣をペロリと舐めながら、ニヤリと笑みを浮かべ、そう言った。

第一章【旅立ち】 第6話 「穏やかなる調和」（後書き）

次回予告――

ずっと続くと思っていた平和――

「さ、レア。ご飯だよー！」

絶対だと思っていた平和――

「それよりさ、ナオって“魔法”使えるんだよね？」

「けどそれは、僕達が思っていたよりも脆くて――」

「ああ。順調さ。ナオも良くやってくれているしね。」

そんな平和は、ある日突然――

「ん……？お兄ちゃん、あそこ、人影が……。」「

崩れ去った――

「おい貴様ら。アルナトはどこにいる？」

第一章「旅立ち」

第7話「アルナト狩り」

レアの事がナオに発覚した、翌日――
ルイとナオは、昼間の分の世話をする為、レアの部屋に訪れていた。

「さ、レア。ご飯だよー！」

ルイの隣では、ナオがレアに食事を与えている。まだ二日目だというのに、ナオは献身的に働いてくれていた。

レアも、友達が増えた事が嬉しいようで、今日はいつも増して機嫌が良い。

「レア、嬉しそうだね。」

ルイがそう尋ねると、レアは「うんっ！」と、表情を輝かせながら言った。

「それよりさ、ナオって“魔法”使えるんだよね？」

「え？うん。少しだけならね。昔、ミリンダさんに教わった事があるから。」

ルイの質問に、ナオは思い出すように答えた。そう。ナオは、少しだが魔法が使えるのだ。

このエルメス大陸には、未だに“魔法”の技術が残っていた。かつての人間達が残した遺産の一つとされており、広い範囲で使

われている。習得するのは難しいとされているが、それでも魔法使いに憧れ、志す物は少なくない。

そして、エルメスでも指折りの魔法使いと呼ばれている“ミリンダ”。

多くの上位魔法を習得したとされている彼女は、魔法の力を使って人々を幸せにする為、世界各地を旅して回っているのだ。

数年前、フィエルの村にもミリンダが訪れた事があった。2週間ほどの短い滞在だったが、ナオはその際、ミリンダから魔法を教わっていた。

「でも、ミリンダさんってやっぱり偉大な魔法使いだよ。教え方がね、すつごく分かりやすいの。」

ナオは両手を大きく広げるようなジェスチャーをしながら、そう言った。やや興奮しているのか、声も弾んでいるように聞こえる。

「へえ〜！じゃあ、少し見せてくれないか？魔法……。」

魔法を見せればレアも喜ぶのではないかと考えたルイは、ナオに言った。

「ええ！？……うん、今でも出来るかなあ……私、あまり練習してないし……。」

ナオは自信無さげにそう言った。確かに、ナオが不安になる気持ちも分かる。数年前……それもたった二週間だけしか教わらなかった魔法を、人前で披露しろと言うのだ。ナオでなくとも緊張するのは当然だ。

「大丈夫だって！ナオなら出来るよ。それに、レアも喜ぶだろうし。」

“レアも喜ぶ”という言葉が、ナオの心を大きく揺さぶった。レアが喜んでくれるなら、やってみても良いかもしれない……。そうナオは思った。

「う……分かった。やってみるよ。」

やがて意を決したかのように、ナオは言った。ナオの魔法を見るのは、ルイも初めてだ。ナオがどれくらいの腕を持っているのか。ルイはまだ知らなかった。

ナオは両手を胸に持って行き、何かを包むかのように構えた。そして目を閉じると、呪文のようなものを唱え始める

「……リ・デルテ・エルダ・フレイ……。」

と同時に、ナオの両手の中に、光が収束し始める。やがてその光は、“ボツ”という音を立て、小さな炎に変わった。

「へえ……小さいけど、ちゃんとした魔法じゃないか。」

まさか本当に魔法が使えるとは……僕は驚きを隠せなかった。レアも不思議そうな表情を浮かべて、魔法を眺めている。

「どうやら成功したみたい。良かったあ……。」

ナオが安堵のため息を漏らす。人前で見せるという事で、本当に

緊張していたようだ。

「ありがとな、ナオ。」

ルイはナオの頭を、優しく撫でてやった。ナオは気持ち良さそうに目を細めると、

「えへへ……。」

につこりと、照れたような笑いを浮かべた

「二人とも、レアの世話は順調か？」

昼間の分の世話を終え、薪割りをやっていたルイとナオに、ケレンが話しかけてきた。

「ああ。順調さ。ナオも良くやってくれているしね。」

「そうよ！心配しなくても、私に任せれば問題なし。」

ナオは自信満々に言うが、その自信は決して虚勢ではない。ナオが加わった事で、本当に問題が無くなったと言っても過言では無いのだから。

「そうか。なら安心だな。これから、レアを頼んだぞ。」

ケレンはルイとナオに手を振ると、自分の仕事に戻っていった。やはり、ケレンもレアの事が心配なのだろう。きっと、毎日気になって仕方が無いのだ。

「じいちゃんが安心できるように、僕達も頑張らなきゃな。」

ルイはそう決意すると、再び巻き割りの仕事に戻った。

「それじゃあ行こうか、ナオ。」

「うんっ！」

夜——ルイとナオは、地下室に向かう準備をしていた。準備とは言っても、食事を作るだけなのだが。

「えへへ。今日は私の最高傑作を作っちゃおう。」

キッチンに立つナオが、嬉しそうに鼻歌を歌いながら言った。キッチンからは、香ばしい香りが漂ってくる。この香りは……ドーナツだろうか。何にしろ、最高傑作に近い作品が出来る事は確かだ。

「へえ。それは楽しみだ。」

「お兄ちゃんが食べるんじゃないでしょ。」

ナオは頬を膨らませると、少しだけ怒ったように言った。こういつた素直な反応してくれるナオは、実にからい甲斐があるのだ。

「さて、それじゃあ行こうか。」

「そうだね。」

ルイ達は食事を持って家を出ると、図書館へと向かった。
図書館までの道は、暗く不気味だ。怖がりのナオは、ルイにベツ
タリとくつついていた。

「ナオ、くつつきすぎだつて。歩きにくいだろ。」

「だつて……怖いから。」

目を潤ませてルイに訴えるナオ。この動作にめっぼう弱いルイは、
素直にナオに従うしかないのだ。

しかし、何を今さら……昨日は僕を尾行していたではないか……
そう心で思っても、口には出せないルイであつた。

「や、やっと着いたあゝ。」

ようやく図書館の前まで到着する。とは言つても、3分も歩いて
はいないが。ナオにはこんな短い道のりでも、恐怖に感じたようだ。

「ん……？お兄ちゃん、あそこ、人影が……。」

不意に、ナオが図書館の屋根を指差し、そう言った。

「え……？」

そこには、確かに人影があつた。辺りは暗い為、姿は確認できな
いが、人影が6つ、図書館の屋根の上に確認できた。

「一体、アレは……。まさか、村人か？だとしたら、まずいな……。」

「と、とにかく、一度家に戻る？」

「そ、そうだな。」

ナオの提案に従い、家に戻ろうと後ろを振り返ると――

「――！？」

そこには、黒いローブを着た男が6人。ルイ達を睨みながら、立っていた。

6人はそれぞれ、右手に武器らしきものを持っている。武器の刃が月明かりに照らされ、キラリと光る。それはまるで、“食い殺してやる”と言わんばかりの不気味な輝きだった。

一体、こいつらは……。

「おい貴様ら。アルナトはどこにいる？」

男の中の一人――ゴールドが、ルイ達に向かってそう尋ねた。突然の事に、ルイとナオは何も答える事が出来ない。

「さっさと言え。言わねば殺す。」

男は手にしている大剣をルイ達に向け、冷めた眼差しで言った。

「一体、おまえ達は……」

やっとの事で搾り出したその言葉。だがその言葉も、ゴールドの更

に大きな声に掻き消される。

「質問しているのはこちらだ！さっさと見え！死にたいのか！」

ゴルドの大声に、ナオはビクリと反応し、ブルブルと震えている。せめて、ナオだけは守らなくては……。だが、恐らくこの男には何を言っても無駄だろう。だからと言って、レアの居場所を話す訳にもいかない。

（どうすれば……。）

ルイは考えるも、良い案は浮かばない。やがて痺れを切らしたゴルドが、ルイに向かって言った。

「もういい。貴様らは役に立たん。殺す。」

ゴルドは手にしている大剣を大きく振り上げる。同時に、大剣の重さに空気が揺れた。冷たい風が、ルイの頬を掠める。

「じゃあな、ガキども。」

もう、ダメだ……。ルイは、深い絶望を覚えた。こんなにも大きな剣で切られれば、ひとたまりも無いだろう。

やがてゴルドの大剣が、僕に向かって振り下ろされた――

……。

……。

「……？」

大剣が振り下ろされて数秒経つが、ルイもナオも死んでいない。それどころか、何の痛みも感じなかった。

「一体、どうして……。――！？」

不思議に思い顔を上げると、そこにはゴルドの大剣を受け止めるケレンの姿があった。ケレンは手に持った剣を両手で構え、迫り来る大剣の力に必死に抗っていた。

「く……。ルイ、ナオ！逃げろ！」

ケレンの痛烈の叫び声が、ルイの耳に届く。だが、ここでルイが逃げたら、ケレンは……。

「でも、今逃げたらじいちゃんが……。」

「ワシに構うな！さあ、早く！」

ケレンはルイの言葉を遮るように、声を張らせた。

ここでジツとしていても、何にもならない。今逃げなければ、祖父の助けを無駄にしてしまう。そう判断したルイは、

「ゴメン、じいちゃん！」

ケレンに向かってそう叫ぶと、ナオを連れて図書館の方へと駆けていった。“地下室になら、何かあるかもしれない……”。そんな希望を胸に――

「チ……。老いぼれが……。まあ良い。おいお前、アルナトはどこ

にいる？」

今度はケレンに標的を変えたゴールドが、厳しい口調でケレンに問い質す。だが、ケレンは一度、“フツ”と笑うと、

「さあな。ワシを殺せたら教えてやる。」

ゴールドを挑発するかのように、そう言った

「死んだら喋れねえだ……ろっ！」

その声と同時に、ゴールドは大剣に力を込め、一気に振り下ろした。同時に、ケレンは横に倒れこむ事でそれを交わす。

「ほう。少しは粘るのか？」

「それはこちらのセリフだがな。行くぞっ！」

ケレンは剣を構えると、ゴールドに向かっていった。ケレンの剣が、ゴールドの顔面を捉える。

「ふんっ。」

が、ゴールドはそれを紙一重で交わすと、ケレンの腹部に強烈な蹴りをお見舞いする。蹴りはケレンの肋骨を的確に捉え、数本を叩き折った。

「がはあっ！」

口から大量の血を吐き、ケレンは倒れる。剣はケレン手を離れ、

ケレンの僅か前方に落下した。

「ふん。老いばれが図に乗るなよ。さあ、アルナトはどこにいる！？」

ゴールドは大剣をケレンへと向け、有無を言わさぬ口調で言った。

「く……。」

ケレンも危険だと悟ったらしい。顔を真っ青にし、悔しそうにゴールドの顔を見つめていた。

その時――

「じるああ！何やってんだてめええ！」

「――！？」

不意に、ゴールドを怒鳴りつける怒声が聞こえた。ケレンは、怒声が起こった方向へと顔を向ける。

「おうコラ。俺らの村長に何の用だ！アア！？」

そこに立っていたのは――フィエルの巨体を誇る羊飼、ジルだった。

いや、そこにいるのはジルだけでは無い。見れば、村の大人達が全員、手に鍬などの農具を持って立っている。

「俺らの村長に手エ出す奴ア、誰だろぅが許さねえっ！」

「ジ、ジル！」

ケレンがジルの名前を呼ぶ。自分のせいでジルを傷つけてしまったという悲しみが、その声には込められていた。責任感の強いケレンならば、尚の事だ。

「こ、このおっ！」

今度は別の村人が、黒ローブの男へと鍬を振り下ろす。だが、その鍬も男に片手で止められてしまう。男はその鍬を押し折ると、村人の顔面に渾身の蹴りをお見舞いした。

「ぐうつ……。」

“バキッ”という鈍い音を立て、倒れる村人。しかし、それだけでは終わらなかった。今度は別の4人の黒ローブの男達が、残りの村人達を襲い始めたのだ。

「う、うわぁっ！」

「ひ……ひい！」

「このおおおお！」

手にした武器で、次々と村人達を地に沈めていく黒ローブの男達。村人達も手に持っている農具で応戦するも、戦闘能力の差は歴然だった。黒ローブの男達は村人の攻撃をもとめせず、村人達を襲っていく。

「み……みんな！」

ケレンは村人達を助けようと、力を振り絞り、立ち上がる。だが、立ち上がったケレンの顔面に、再びゴルドのケリが炸裂する。

「ぐっ！」

小さな叫び声を上げ、再び倒れるケレン。ゴルドは更に追い討ちを掛けるかのごとく、ケレンの頭を踏みつけた。

「さあ！ここで見ていろ！村人達がやられていく様を！これ以上村人を傷付けなくなかったら、アルナトの居場所を言え！もつとも、もう手遅れの奴もいるだろうがな。」

ゴルドは言い終えると、半ば叫び声にも近い下品な笑い声を上げた。

第一章【旅立ち】

第7話「アルナト狩り」（後書き）

次回予告

和えかなる村に、突如訪れた悪夢――

「そんなのイヤ――！」

次々と倒れていく村人達――

「レア……残念だけど、今日は遊んであげられないんだ。」
彼らを守りたい――

「ルイ……死んじゃイヤ……！」

その想いが空に響き渡るとき――

「果てるわけにはいかないんだッ！」

少年は“覚醒”する――

次回 第8話「目覚めし剣」

“地下室になら何かあるかもしれない”——そんな希望を持って、ルイは地下室へと足を進めていた。ここになれば、村の不用品や昔使われていた“何か”がまだ保存されている可能性がある。それがあれば、微力ながら村人達の力になれるはずなのだ。

「とりあえず……。」

ルイは地下室にある扉を、片っ端から開けていった。この地下室には、20あまりの扉がある。ルイはレアの部屋に通じる扉しか開いたことが無かったため、一つ一つの扉を開いて中を確認する必要があった。

「くそ……。何もないな……。」

もうかれこれ10個の扉を開けているが、中には役に立ちそうなものは何も残されていなかった。だが、生活用品などはいくつか発見することが出来た。これならば、どこかの扉に武器も残されている可能性もある。

「お兄ちゃん……。」

後ろから響いた、ナオの心配そうな声がルイの耳に届く。

ルイが振り向くと、そこには不安げな表情を浮かべながら立っているナオの姿があった。微かだが、体は震え、目には涙が溜まっている。それはそうだろう。こんなにも幼い少女が、世にもおぞましい体験をしているのだから。

レアを守ることはもちろんとして、大切なナオを守るためにも、

ここで何かを発見しなければならない。

「大丈夫だよ、ナオ。僕が守るから。」

ルイは自分出来る精一杯のたくましい顔をして、ナオに言った。

「でも……私を守ったら、お兄ちゃんも傷ついちゃう……。」

「僕はどうなったって良いんだ。ナオが守れば……。」「
「そんなのイヤー!!」

突然、今まで泣きそうだったはずのナオが、声を荒げた。その迫力に、ルイも若干の驚きを隠せない。それほどまでに、ナオの声は力強いものだった。

「ナオ……。」

「お兄ちゃんはそれで良くても……私はイヤなの!お兄ちゃんが危険な目に遭うなんて、絶対にイヤ……!」

ナオの声の震えは、より確実なものとなっていた。いつもは元気で明るく、決して涙を見せないナオ。そんなナオが、ここまで声を震わせている所を、ルイは今までに見たことが無かった。

「どうして……!せつかくレアとお友達になれたのに……!お兄ちゃんと一緒に世話できると思ったのに……!どうして……!」

さらに声を震わせ、ナオは続けた。

僕の大切な妹のナオ。いつも僕の世話をしてくれていたナオ。そんな大切なナオを泣かした連中が、ルイはやっぱり許せなかつ

た。

ナオが心配するのも分かる。だが、あいつらだけはこの村から追い出さなくてはならないのだ……！

「ナオ……。」

震えるナオの体を、ルイはゆっくりと、しかし力強く抱き締めた。ナオを抱き締め密着した事で、ナオがどれだけ怯えていたのかを実感する。

「大丈夫。僕は死なない。絶対にレアとナオを守って見せるから。」

確たる決意を込めて、ルイは言った。どうしてか、そう言い切れた。

ルイの断固たる決意を感じ取ったのか、ナオはそれ以上何も言わず、ただ小さな鳴き声を漏らすばかりだった。

「とりあえず、ナオはレアの部屋にいて……。」

泣き崩れるナオに肩を貸し、ルイはレアの部屋へと向かった。

「……！」

レアの部屋に入ると、そこにはキラキラと瞳を輝かせたレアが待っていた。恐らく、今もルイ達が世話に来たと思っているのだろう。だが、ルイはレアに真実を告げねばならなかった。

「レア……残念だけど、今日は遊んであげられないんだ。」

「……？」

ルイの言葉に、レアは不思議そうに首を傾げた。

「レアの命を狙ってる奴らが……この村に来た。」

ルイは出来る限りの冷静を装って、そうレアに告げた。ルイの言葉を聞いたレアは、一瞬“ビクリ”と体を震わせる。

「でも、安心して。僕がレアを守るから。だから、レアはここに居て欲しい。」

そう言っ、ルイはレアの部屋を後にしようとする。が――

がしっ――

「えっ……？」

部屋を出ようとするルイの体を、レアがぎゅっと抱き締めていた。強く、そしてしっかりと、まるでルイを行かせんとばかりに。

見れば、レアの体も震えていた。恐らく、レアはこういった経験を何度も積んできたのではないだろうか。自分と友達になった者が、自分を守るためにアルナト狩りに挑み、そして散ってゆく。それはみんな自分のせいで。自分がいなければこんなことにはならなくて。だけど、いくら嘆いたところで現実が変わらなくて。

そんな憤りを、何度も経験してきたのではないだろうか。

故に、レアはルイを行かせたくない。アルナト狩りの元へと行っ

てしまえば、今までと同様、ルイも散ってしまう。レアは、それがイヤだった。

「ダメ……ルイ……ダメ……！」

レアは何度も、そう繰り返していた。ただ永遠の命を持っているだけの非力な自分に出来ることは、これくらいしかないから――

「レア……。」

その真摯な思いは、確かにルイに伝わった。深く、そして厚く、ルイの心に刻み込まれた。

だが、それでルイの決心が変わるわけではなかった。いや、むしろ、決心はより大きく、確かなものとなっていた。

今の自分に出来ること――大切な友達のレアと、大切な妹のナオを守ることに――

アルナト狩りに挑めば、ルイは死んでしまうかもしれない。だが、レアとナオが生き残れるかもしれない。

ルイには、それだけで十分だった。

「ありがとう、レア。だけど僕は行くよ。レアを守るために。レアが一生懸命応援してくれるなら、僕は死なないから。」

ルイは満面の笑みを浮かべ、レアに言った。

やがて、レアがルイを抱き締めていた力が弱まっていく。

「レア。ナオも。ここで待っていてくれ。きっと、僕は帰ってくるから。」

「お兄ちゃん……死なないで。」

「ルイ……死んじゃイヤ……！」

ナオとレアの言葉が、想いが、ルイの心に染み込んでいく。その想いは確実に、ルイの力に、そして剣になる。

「ああ。」

力強く頷くと、ルイはゆっくりとレアの部屋を後にした。

「ふう……。」

道具探しを再開して、およそ3分が経過した。その間、ルイは3つの部屋を調べ終え、残る2つの扉の搜索を開始していた。

だが、一つ心配な点がある。それは、ケレンの安否だった。地下室からでは当然地上の様子は確認できず、ケレンの様子も分からない。

どうか、無事でいて欲しい——ルイは、そう祈るしかなかった。

「ダメだ……ここにも無い。」

残る二つの扉のうち、一つの扉には、残念ながら役に立ちそうなものは無かった。生活用品、何に使うのかもわからない水晶玉。そして、古びた杖。発見できたのは、おおよそ戦闘には使用できそう

もない物ばかりだった。

「よし……！」

気を取り直し、ルイは最後の扉の前へと立つ。この扉の先に何か役に立ちそうなものが無ければ、最悪素手で戦うしかない。だが、当然ルイは武道に長けているわけでもなく、とりわけ腕力が強いわけでもない。素手でやっても、勝ち目などあるはずはないのだ。

ギイ……

ゆつくりと、半ば腐りかけた扉を開く。途端、中から大量の誇りが噴き出てきた。

「ん……？」

手に持っていたロウソクで部屋を照らすも、全体を照らすことは出来なかった。今まで回ってきた全ての部屋は、手に持っているロウソクだけで全体を照らすことが出来たのだから、つまりこの部屋は、今までのどの部屋よりも広く作られているということになる。

「仕方がないな……。」

ロウソクの炎を、部屋の松明に灯していく。意外と簡単に火は灯り、同時に部屋の全体像が浮かび上がった。

「——これは！？」

浮かび上がってきたのは、今までとは全く違う構造の部屋。壁のいたる所に草のツタを思わせる紋章が描かれ、回りには豪華な装飾

品も置かれている。最奥には、どこか神々しい巨大な像が建っていた。

「なんなんだ……この部屋……。」

見た限りでは、使用用途が全く分からない。一体誰が、何のために作った部屋なのか……。

「あっ！」

装飾品の一つに、ややサビついた剣を発見する。非常にシンプルな作りで、それほど強靱というわけでも無さそうだが、戦闘には使えるだろう。切れ味もまだ健在のようだ。

だが、ルイが剣を持つのはこれが初めてだった。初めて持つ剣は、予想以上に重く、自身のバランスを取るのさえ危うい。こんな調子で、あんなゴツゴツとした大剣に敵うのだろうか。

「……いや！無理でもやるんだ！」

そう言って、ルイは自分の頬をバシバシと叩くと、その部屋を後にした。

目指すは地上。ケレンが戦っている場所へ――

「み、みんな！」

ルイが地上に出ると、そこでは村人と黒ローブの男達が、熾烈な

戦いを繰り広げていた。いや。それは戦いというよりも、一方的な攻撃と言うべきか。村人達は、黒ローブの男達に手も足も出ないようだった。

「ル……ルイ……！」

ゴールドに足蹴にされていたケレンが、声を上げた。その声で、ルイはケレンの置かれた立場に気付く。

「じ、じいちゃん！」

苦しそうに顔をしかめるケレンに向かって、ルイは叫んだ。

「ほう。さっきのガキか。むざむざ殺されに来たか……。それとも、アルナトの場所を言う気になったか……。」

ルイの存在に気付いたゴールドが、再びいやらしい笑みを浮かべてそう言った。自分達の村を襲い、村人達を傷つけながら、それでも笑みを浮かべるゴールド。そんなゴールドの非情さに、ルイは例えようの無い怒りを覚えた。

「残念ながら、どっちも違う。僕は、お前達を倒しに来た。」

そう言っ、ルイは剣を鞘から抜き、構えた。剣を持つのも初めてのルイにとっては、当然初めての構え。それは、お世辞にも綺麗と呼べるものではなかった。

「ふはははははは！ガキが笑わせてくれる！そんなヘナチヨコな構えで、我々を倒すだ！？ふははははははははは！」

ゴールドはルイの構えを見て、大きな笑い声を上げた。

「うるさい！やってみなきゃ……！分からないだろ！」

ゴールドの癪に障るような笑い声を遮るように、ルイは言った。途端に、ゴールドの笑い声がピタリと止んだ。

「ほう……。ではやってみてもらおうか。……行け。」

ゴールドが、村人を攻撃していた部下の一人に向かって、そう指示する。

「はっ！」

指示された部下はそう返事をする、歪な形状をした槍を構え、ルイに突進してきた。

シュッ――

目にも留まらぬ速さで、黒ローブの男はルイの眼前まで到着する。そして、構えていた槍をルイめがけて振り下ろした。

ブウンッ――

「ぐッ！」

キンッ――

ルイはその一撃を剣で弾くことで、なんとか防御する。が、力の差は歴然。攻撃を弾いた衝撃で、ルイはバランスを崩してしまう。

そこへ、再び男の槍が振り下ろされる。

「うわっ！」

ルイは持ち前の反射神経で、どうにか男の一撃をかわす。だが、反射神経だけでかわし続けられるほど、この男の攻撃はやわではない。その事を、攻撃を受けたルイははつきりと実感していた。

「はあっ！」

ギンツ——

男は槍を構えなおすと、正面突きを繰り出してきた。ルイは剣でガードするも、あまりの力の差に、後方に吹き飛ばされてしまう。

「うわっ！」

後方へと飛ばされた衝撃で、ルイは転倒する。が、すばやく立ち上がると、体勢を立て直した。

そんなルイに向かって、黒ローブの男はゆっくりと歩み寄ってくる。

「ぐっ……！」

このままでは、負けてしまう。殺されてしまう。そうなれば、当然レアもナオも守れない。それどころか、村人達まで危険な目に遭ってしまう。

『おうルイ！おめえはいつも元気だなあ！』

『やあルイ君。お仕事頑張ってね。』

『さうで、仕事頑張らなきゃね。』

村人達の言葉が、脳裏に浮かぶ。穏やかで優しい村人達。時に厳しく、仕事熱心だった村人達。そんな村人達を、失いたくない。そして――

『ルイ。お前はワシの自慢の孫だよ。』

『お兄ちゃん！隠し事してるでしょ！』

『ルイ……。』

おじいちゃん、ナオ、そしてレア……僕のも大切な人たち。僕にとっては掛け替えの無い絆で繋がっている彼らを、絶対に失いたくないんだ――

そうだ――

僕は――

僕はこんなところで――

「果てるわけにはいかないんだッ！」

漆黒の夜空に向けて、ルイはそう叫んだ。その叫びは、空を突き抜け、どこまでも響き渡るほどに澄んでいた。

ドクンッ――

「——!？」

一瞬、ルイの鼓動が激しくなった。——いや、違う。一瞬だけではない。気が付けば今も、ルイの鼓動はより激しいものになっている。

ドクンツ——

ドクンツ——

ドクンツ——

「ぐうつ!」

あまりの鼓動の激しさに、一瞬、目眩がした。だが、それもすぐに収まり、今度は言いような無い“力”が、ルイを包み込んでいった。

「なんだ……これ……。力が……溢れて……!」

やがてルイの右頬に、草のツタを思わせる紋章が浮かび上がる。その紋章は、眩しく、そして神々しい光を放っていた。

「すごい……この“力”……!」

突如自分を包み込んだ“力”に、ルイ自身も驚きを隠せなかった。それはそうだろう。今まではふらくほどに重く感じていた剣が、まるで羽根のように軽く感じるのだから。

ゆつくりとルイに歩み寄っていた男が、やがてルイの前へと到着する。その男は再び槍を構えると、先ほどと変わらぬスピードでルイを攻撃し始めた。

(アレ……こいつの攻撃、こんなに遅かったっけ……?)

ブウンッ――

その攻撃をルイは軽々とかわす。その反射神経は、尋常では考えられないものとなっていた。

男は休むまもなく、攻撃を繰り返し続けた。しかし、ルイはそれらの攻撃全てをいとも容易くかわし続ける。

(すごい……！見える……あいつの攻撃が、見える……！)

ルイは男の最後の攻撃を避け切ると、クルリと一回転して後方へと着地した。

「お、おい！あれ、本当にルイか……！？」

村人の一人が、ルイを見てそう呟いた。だが、そう思っているのは彼だけでは無かった。村中の人間が、ルイを見て驚愕していた。それほどまでに、ルイの運動能力は人間離れしていたのだ。

「今度はこっちの番だ。」

そう言っ、ルイは剣を構える。その構えは、先ほどのものとは比べ物にならないほど美しい構えだった。一部の隙も無く、相手をいつでも捕らえられる。そんな完璧な構えだった。

「はあっ！」

ズバァッ――

ルイは思い切り地面を蹴ると、一瞬で男の前まで移動。相手に武器を構えさせる暇さえ与えずに、一瞬で男を切り裂いた。

男は、何も確認することが出来なかった。自分がいつ切られたのかも分からぬまま、ただ倒れるのみ。

「ふんっ！」

次にルイは、村人を攻撃していた男三人の前へと移動する。そして、真っ先に武器を構えた男を、一撃で粉碎した。

「ぐああっ！」

声を上げて、男は倒れる。その男も、先ほどの男と同じく、ルイの攻撃を確認することさえ出来なかった。

「うわあああっ！」

遅れて武器を構えた男が、ルイの背後で自分の武器を振り下ろす。その武器は大鎌のような形状をしており、他の武器と同様、歪な形状をしていた。

しかし、ルイは振り向きざまに男の武器を剣で弾く。力の差は歴然。男の武器は、漆黒の空へと弾かれていく。武器を失い、無防備となった男に、ルイは一閃を浴びせた。

「はあっ！」

一番武器を構えるのが遅かった男が、その双剣をルイに向かって振り下ろす。が、ルイはその一撃を、剣を使って軽々と受け止めた。そして、そのまま剣を返す。男はその衝撃で、バランスを崩した。

「うわっ……！」

ルイはその隙を見逃さず、男に痛烈な一撃をお見舞いする。男は何が起こったのかも分からぬまま、ただ倒れていった。

「はぁ……はぁ……。」

荒くなった息を整え、ルイは周りを見回す。

そこには、力なく倒れた黒ローブの男達の姿があった。これでルイは、4人の黒ローブの男達を倒したことになる。

これで、ゴールドを含めて残り2人――

突然ルイに与えられた、この“力”――黒ローブの男達を一瞬でなぎ倒すほどの“力”――

この力の正体は何なのか、ルイには分からない。だが、この“力”があれば、みんなを守る――今のルイには、それだけで十分だった。

ルイはケレンを足蹴にしているゴールドに向かって、強い口調で言った。

「……次は、お前たちだ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0012b/>

空ニ奏デシ永遠ノ唄

2010年10月12日06時08分発行